

■このコーナーを担当したのは、

箱守 まり子^{はこもり}さん（関館）

涙あり、笑いありの劇団「ゴン太」を応援しよう

劇団「ゴン太」は、演劇を通して子どもたちの豊かな表現力や想像力を育むために、子ども演劇学校として平成14年6月、旧関城町に誕生しました。同年12月に初上演。以後、毎年オリジナル作品を上演し、好評を得ています。3月には、「ペアーノ」で演劇学校卒業公演が予定されています。公演に向けて、稽古にも一段と熱が入っている劇団「ゴン太」を紹介します。

自分の持ち味を生かして

6年前に結成された劇団「ゴン太」は、現在13人の子どもたちと、舞台監督、演出家、衣装、美術、照明、そして9人の役者などで構成されています。稽古はおもに関城地区にある市生涯学習センター「ペアーノ」で、毎週水曜日、夕方6時から行っています。子どもたちは全員小学生。大半は結成時から参加している関城地区の子ですが、昨年、下館地区より2人が入団し、活動にも広がりを見せています。

結成当時は、大人も子どもも、芝居のことなど何にもわかりませんでした。専門講師による舞台用語や演技の基礎、発声の基礎などの指導を受け、練習を重ねるうちに徐々に上達。初めは台本を棒読みだった団員たちも、今では自分の持ち味を十分生かせるまでになりました。

そんな中、平成18年には、筑西市生涯学習フェスティバルに出演依頼があり、船玉地区

の民話をもとに作品化した「ゆびきりげんまん」を筑西市民会館にて上演。ご協力いただいた地元のコラスグループ「コール・レスポワール」の美しい歌声と、子どもたちの迫真の演技で場内を沸かせたのも記憶に新しいところです。

演劇を通して大きく成長

「時は1343年、都では……」。弁士の語りが始まると、何とも心地良い緊張感が走ります。子どもも大人も、自分の役をこなそうと台本片手に真剣そのものです。

現在、3月15日に「ペアーノ」で行う卒業公演に向けて、稽古の真っ最中。今回の出し物は、関城の歴史的人物、武将・関宗祐公^{せきむねすけ}を題材に書き下ろした「陽―雲流るる果て―」です。歴史的背景の中、どこまで子どもたちが演じることができるか、また、そこに加わるちよつと渋味の大人の演技も楽しみです。

演劇学校に参加している子どもたちに感想を聞いてみると、「演劇を始めてからたくさ

んの人とふれ合うことができて、とても楽しいよ」「みんなと一緒に練習ができ、楽しかったです。演劇のおもしろさや難しさもだんだんわかってきました」と素直な答えがかえってきました。

演劇を通して、少しずつ成長している子どもたち。この子たちが、これから大きく羽ばたいていくことを願っています。みなさんも、ぜひ応援してください。



▲公演に向けて練習に励む劇団「ゴン太」のみなさん